氏　　名　　山崎　徳子

論文題目　　自閉症のある子どもの関係発達

―「育てる - 育てられる」という枠組みでの自己感の形成を中心に―

論文要約

本論文は，自閉症のある子どもの自己感の形成過程を，障碍児学童保育Ｐにおけるいくつかの実践事例を手掛かりにして解明したものである。

第Ⅰ部　序論　自閉症をめぐる問題と方法論

第１章　自閉症のとらえ方とアプローチ　その変遷と問題

自閉症については，これまで数多くの研究がなされ，知見が積みあげられてきたが，そのほとんどは今ある子どもの「症状」について，その原因や成り立ちを究明し，その軽減を目指すものであり，子どもに関わる者―特に親をはじめとする養育者や保育者―の主観的な体験はいまだ十分に明らかにされていない。また，そこにおける子どもは，あたかも「症状」や「（不完全な）機能」の「束（寄せ集め）」であるかのように描かれており，一人の人間として，他者とさまざまな形でコミュニケーションをしながら営んでいるはずのその子の「生活」や，その積み重ねによって生み出されていく「心の育ち」が見えてこないという問題もある。

第２章　本研究の問題意識と目的－「育てる－育てられる」という枠組みが持つ意味

自閉症児の養育者は，先行研究が暗に前提しているような単なる「共同療育者」ではなく，わが子の幸せを願うと同時に，自分自身もまた固有の願いや苦悩を抱える一個の主体である。子どもの「心の育ち」は，そうした「育てる者」のひきこもごもの思いと切っても切り離せない関係にある。

そこで本研究においては，D・スターンの提起した「自己感」という概念を，「自己」（および他者）に関わる子どもの諸々の主観的体験と，「育てる者」に立ち現れるその都度の子どもの印象を説明するための鍵概念として位置づけた。自閉症のある子どもを療育対象と見る前に，「育てる－育てられる」という枠組みの中で固有の自己感を育んでいく存在と捉え，その自己感の形成過程を明らかにすることにより，自閉症研究に他者との関係性から子どもをとらえるという視点を導入するための，理論的足場が得られると考えられる。

この問題にアプローチするために，まず，自閉症児の自己感の形成について手掛かりを与えてくれそうないくつかの先行研究を概観し，スターンやワロン，村上靖彦や鯨岡峻などの理論と、著者自身の養育経験を織り合わせながら，「育てる者」の実感に即した形で仮設的に一般的な子どもと自閉症のある子どもの自己感の形成過程を描出した。

その中で，自閉症児の場合には，一般的な子どもとは違ったプロセスが進行する可能性が浮かび上がった。すなわち、スターンの「中核的自己感」が実は養育者との間身体的コミュニケーションを前提にしており，自閉症児においてはそのコミュニケーション自体が難しいがゆえに，異なった自己感の発達過程があり得るという視点である。そこに自閉症の子どもを「育てる者」ならではの諸々の思いが抜き差しならず食い込んできて、子どもの自己感のありようを色づけていくのである。

また，「言語的自己感」の発生過程についても，ワロンの自我論を援用しながらより詳細に把握し，これを鯨岡峻の理論―「育てる - 育てられる」関係の中で，子どもが「私は私」と「私は私たち」の二面から成る心を育んでいく―に接続した。

以上の作業によって，自閉症児の自己感の形成過程を，育てる者の実感に沿った形で扱うための理論的枠組みを準備した。

第３章　方法論　実践の場における関与・観察という方法－私の目指す方法的態度

著者は障碍児学童保育Ｐの指導員として７年間にわたり「関与・観察」を行った。その観察の方法論を精緻化し，「関与・観察」に必要な方法的態度について検討した。

著者自身が以前別の観察現場で感じた「おじゃまする感」や，障碍児学童保育Ｐで体験した「観られる経験」など，観察に伴われる違和感を詳細に分析し，「実践者」と「観察者」のあいだの溝が何によって生み出されるかを明らかにした。結論のみを記せば，その溝は，自分が実践者として関わるか否かといった観察形態によってというよりは，むしろ子どもの幸せを願いつつ，身体的直観に基づいてその都度の関わりの意味を考えていく「共同する者」として当事者と関係を結べるか否かによって広がりもすれば狭まりもする，ということになる。こうした議論を踏まえて，著者自身の観察を「共同する者」によるそれと位置づけたのである。

第Ⅱ部　本論　事例と考察

第４章　事例

第Ⅰ部での理論的整備を踏まえて，数年間をかけて得られた3人の子どもの障碍児学童保育Pに

おける多数のエピソードと，その母親へのインタビューを分析し，自閉症の子どもの個性的な自己感の形成過程を描き出した。

１　桃・薫さん　学童期　構造化のプログラムを越えて

桃（小 2，女児）は乳児期，養育者との間主観的な通じ合いが乏しいような子どもであったため，母親の薫さんは，構造化のプログラムを生活の中に取り入れていた。桃のＰでのひと夏の間の変化を目の当たりにし，桃を動かしているものや，薫さんの心情について考察した。

桃は、Ｐでの活動を重ねるに連れ，保育者と情動的な「楽しさ」を共有することによって他者の身体的把握が可能になっていき，親しい他者とのかかわりを求めるようになった。

また，こうした子どものあり様に出会ったとき、薫さんは自分の情動を子どもの内面に深くくぐらせることー子どもに「成り込む」ことーを行っていた。これは通常の子育てと何ら変わるものではない。

２　まさき・純さん　思春期　「私は私たち」という意識はいかに育つか

まさき（中2，男児）が，「友だち」と呼んで同世代の子どもとかかわろうとするまでを，「私は私」と「私は私たち」という自己意識の観点から考察し，彼の周囲の人々のかかわりの意味を問うた。

まさきは象徴的な「棒人間」にその都度の自己を投影し，それを用いて徐々に他者とのコミュニケーションの世界に開かれていった。「私は私たち」という自己意識の元になったまさきの「内なる他者」に生命を吹き込んだのは，「障碍への対応」ではなく，周囲の人々の受動的なかかわりや，まさきの成長を喜びあう心情であった。

３　きりた・恵さん　「軽度」と呼ばれる子どもー自己肯定感の形成

きりた（小3，男児）は，いわゆる「軽度発達障碍」の部類に入る，やはり自己感の成立に固有の困難を持っている子どもである。母親の恵さんには，きりたと繋がっている感じが常にある。きりたのふるまいへの感じ方が著者と恵さんではちがっていることは、そのことに起因していると思われる。

Ｐでの3年間の活動の中で，ゆっくりと他者を思いやる心を育んでいったあり様を描いた。そこから見えてきたのは，他者への関心と自己理解は，関連し影響を与えながら，その内容が充実するということである。

第５章　自閉症のある子どもの関係発達の様相－自己感をめぐって

以上の事例などから得られた理論的帰結（自閉症児の自己感の形成過程）は次のようなものである。

①関身体性の働きが弱いため，養育者との通じあいに基づいた中核的自己感を形成するのではなく，衝動的行為の動作主としての「自らなす自己感」を形成する。

②養育者の努力やかかわりによって，「馴染みの光景」としての養育者とのあいだにとりあえずの安心感を持てるようになってくる。

③世界が一定程度秩序だったものになってくることによって，その世界を変えていけるという感覚（「行為の主体としての自己感」）を持つ。

④「行為の主体としての自己感」を基盤として，個別具体的な他者との相互交流を経験し，その中で楽しさや安心感などの肯定的感情を体験することによって，身体が「覚醒」してくる。一時的に「手応えのある自己感」が得られる。

⑤「手応えのある自己感」は，子どもの情動状態によっては容易にほどけて，前の「行為の主体としての自己感」に戻ることがある。

⑥事物の表象化が進む。子どもが用意した自己の代替物に対して他者が関心を示すことによって，それが「自己の表象」としての位置を獲得していく。その「自己の表象」を用いて，他者とコミュニケーションをすることによって，それはより豊かなものになっていく。

⑦「手応えのある自己感」と「自己の表象」とが溶け合い，「私」の意識と「私は私たち」の意識が成立してくる。

⑧子どもによっては，そこからさらに自己を客観的にまなざす視点を発展させ，うまくやれているという感覚や達成感などの自己肯定感が生み出されてくる。

終章

前章までに得られた知見から，自閉症のある子どもへのまなざしについて考察した。

自己感の形成において，子どもが安心感を得られるような構造を形作るためには環境調整も一定の役割を担うことができるかもしれないが，その後の自己感の発達を支えるためには「育てる者」の存在が不可欠であることを見出した。

※注記

本論文の第４章１と第４章２基となった論文は，すでに以下の学術誌に掲載済みである。本論文の内容等を引用する際には，これらに掲載済みの論文，または本論文の原著（京都大学人間・環境学研究科所蔵の原典あるいは今後出版予定の著書）に直接当たっていただきたい。

第４章１　山崎徳子.(2009).『自閉症児の母親はいかに子どもを「分かる」かー対話からさぐる自閉症児への向かい方ー』. 応用心理学研究.第34巻第2号.182頁－192頁.

第４章２　山崎徳子.(2010).『「みんなの中の私」という意識はいかに育つかー自閉症のある中学生の自己意識の変容の事例からー』.保育学研究.第48巻1号.23頁－35頁.